

## ワークショップ「モリスコ研究の現状と課題」

### コメント

宮崎和夫

現在のスペインにおけるモリスコ研究は、とりわけ、かつてナスル朝グラナダの領域であったグラナダ、マラガ、アルメリアの3県の大学において、村落レベルの微細な差異を取り上げた実証研究が非常に盛んだが、そこから新たなパラダイムはなかなか生まれてきていないように思われる。そのような重苦しい研究状況に接してきた者にとって、地理的にも時間的にも非常に視野の広い本日の3報告を聞くと、自分の研究にも新たな地平が開けることが予感され、報告に触発されて以下のような疑問や異見を抱いたことも含めて、非常に有意義な研究会であった。

タニ氏はその報告の中で、ユダヤ人がローマ時代からイベリア半島に定住したとしているが、それはいかなる根拠に基づいているのか、疑問を抱いた。文献における言及が根拠だとすると、そこで「ユダヤ人」として現れる人物や集団が、本当にユダヤ教の信仰を持っていたか否かが検証されているのだろうか？ そのような不安を抱くのは、西ゴート時代から近代に至るまで、キリスト教徒マジョリティから憎悪された人物や集団が、エスニシティや宗教を問わず「ユダヤ人」と呼ばれるケースが、よくあったからである。

また、中世のイベリア半島においてユダヤ人とムスリムとの間に非常にポジティブな関係があったとするタニ氏の見解には同意するが、それは主として、後ウマイヤ朝期のことであろう。タイファ王国期になると、例えば、ズィール朝グラナダでは、ユダヤ人のイブン・ナグレラとその息子が宰相として活躍したが、そのことが反ユダヤ暴動を招いて、グラナダのユダヤ人コミュニティは大打撃を受ける。さらにその後、イスラーム原理主義的なムラービト朝やムワッヒド朝の侵入により、ユダヤ人はモサラベとともに迫害を受け、ルセーナのようなユダヤ学術研究の中心地も消滅する。この時期に、キリスト教圏に逃れたユダヤ人も多い。そして、ナスル朝グラナダで残存していたユダヤ人の数は、統計上の誤差の範囲内である。ムスリムのユダヤ教徒に対する寛容の度合いは、国家権力やマジョリティの社会の側に余裕があるかどうかによって異なってきたのではなかろうか。

カトリック両王はムスリムに対して寛容で、降伏協定を遵守しようとしていたにもかかわらず、強制的改宗を主張するシスネロスの圧力に屈した、とタニ氏は主張されるが、両王はムスリムをいずれ改宗させるつもりであったというのが私の見解である。両王が征服戦争中にナスル朝から奪取した諸都市のムスリムとの間に締結した降伏協定を観察すると、開戦当初は不動産没収を含む厳しいものであったにもかかわらず、戦況が押し詰まるにつれて、従来どおりの生活を続けることを許す寛大なものになっている。これは、戦闘の長期化による財政逼迫に悩まされた両王が、早期終戦を優先させて、ムスリムとの共存から生ずるはずの問題の解決を先送りしたことを示す。

タニ氏が「追放令」として挙げたもののうち、1502年と1609-14年のもの以外は、追放令ではなく、むしろ、スペイン・キリスト教社会への同化を強制する法令である。いったんキリスト教に改宗させた人間を異教徒の国へ追いやって、彼らが「背教」し「地獄に落ちる」のを放置するのは、キリスト教徒の良心には耐え難いことであった。

Morisco という語は、イベリア半島のキリスト教徒から見た（マグリブ・アンダルスの）ムスリムを意味する moro の形容詞形なので、そこから、タニ氏が指摘するような、日常会話レベルでの用法の混乱も発生するのだと思われるが、キリスト教徒側公権力による公文書においては、「征服後改宗した人々」という意味での用法が、1525年の王室礼拝堂における裁定のころまでには定着している。ただし、この用語はあくまでキリスト教徒側の一方的なものである。愛場報告によれば、マグリブのムスリムがアンダルスから来た人々を「モリスコ」と呼ぶことがあったようだが、そういうことがあったとは考えにくい。

愛場報告は、追放されたモリスコの運命を、マグリブに現存する3つの国民国家に分けて論じていたが、これらの国家は17世紀当時、存在しなかったはずである。「モロッコ」は、オスマン帝国に入らなかった地域を意味すると考えればよいが、アルジェリアもチュニジアもオスマン帝国に支配されていたはずである。この二つの地域の差は、政情が安定していたか否かの差だけであると考えてよいのか？ また、これらの地域状況の差が、そこへ渡ったモリスコの運命にどのように影響を与えたのか、より詳しく聞きたいと思った。また、ヨーロッパ側で言うバルバリア「海賊」は、pirata でなくて corsario であり「国のため」に戦った人々であるとする、マグリブ諸国の歴史家の主張が紹介されたが、それは近年のこれらの国々におけるナショナリズムの高揚と関連があるように思われる。現在の歴史学では、corsario と pirata の違いは公権力の認可の有無によって客観的に区別しうるものとされているが、16-17世紀には、キリスト教社会とイスラーム社会のどちらの側の人々も、自らの側の海賊行為を共同体や君主や神のために戦う英雄的行為とみなし、自分たちに敵対的な海賊のみを pirata として認識していたというのが、実情に近いのではないか。

堀内報告は、始まり終わりもない単調な繰り返しと思われたアンダルシア音楽（「アンダルシア音楽」とするべきであろう）に、実は複雑で深遠な理論があったことを解き明かして、きわめて有益であった。現在のモロッコではアンダルシア音楽が盛んであると、報告中で見せていただいたビデオにあったが、それはどの程度なのか、若者の間で果たしてポップミュージックを凌ぐほど盛んなのかどうか、興味を引かれた。そのことは、現在のモロッコの人々が、アンダルシアの歴史や文化にどの程度アイデンティファイしているかということの、ひとつの指標ともなりうると思われる。